

## 外国の童話がやってきた

平成10年4月28日～5月22日

「裸の王様」「おおかみと七匹の子やぎ」など、グリムやアンデルセンの童話のいくつかは、誰でもすぐにストーリーを思い浮かべることができるでしょう。これらの童話が日本にやってきたのは、明治20年代からだと言われています。日本風に翻案されたり、訓話として紹介されたりもしました。和服を着たおおかみ、狂言になった裸の王様、日本の名前を付けられた主人公達、教訓的な解説など、日本にやってきた頃の童話をお楽しみ下さい。

### 展示資料一覧

<>内は当館請求記号

グリム

#### <狼と七匹の子やぎ>

母親山羊の留守中に、おおかみがお母さんのふりをしてやってきて、7匹の子山羊のうち6匹を食べてしまうお話。お母さん山羊は、子やぎを助け出したあとおおかみのお腹に石を詰めます。

#### 1. 『おほかみ』

上田万年訳 東京 吉川半七 明22.10 14丁 19cm (家庭叢話 第1)

<YDM102874>

※重訳。山羊が羊になっている。また、狼も羊も和服を着ている。

#### 2. 「おとぎ芝居 羊の天下(グリムお伽噺)」

大江小波

<雑52-10>

『少年世界』 第10巻第14号 明37.10 博文館

※児童劇の脚本に仕立てられている。

#### 3. 「子猫の仇」

さざなみ

<雑52-10>

『少年世界』 第1巻第16号 明28.8 博文館

※翻案。山羊を猫に、狼をやま犬にしている。

#### 4. 『八ツ山羊』

呉文聡訳 東京 弘文社 明20.9 5T 19cm (西洋昔噺 第1号) <YDM103161>

※子供向けの単行本として珍しいおこし絵の仕掛け本。子山羊が8匹になっている。

#### <勇ましいちびの仕立屋さん>

蠅を一打ちで七匹殺したことから「一打ち七匹」を掲げて旅にでた仕立屋のお話。前半は、大入道と力比べをします。後半では、王から出された三題の難問を解決し、王女と国の半分を手に入れます。最後は寝込みを襲われるが巧みにかわしてその後は平穩に暮らす。

#### 5. 「<sup>したてやていろく</sup>仕立屋貞六」

雌雄樓主人

<雑52-1>

『少国民』 第8年第18号 明26.1 鳴臯書院〔編〕 鳴臯書院

#### <白雪姫>

「鏡よ鏡、鏡さん。世界で一番美しいのはだあれ。」「それは白雪姫です。」「森の奥で七人のこびとと暮らすことになった白雪姫は、変装したお後の持ってきた毒リンゴを食べてしまいます。死んでなお美しい白雪姫を王子が見初め、城へ運ぶ途中、姫は息を吹き返し、二人は結婚します。

#### 6. 「小雪姫」

小波

<雑52-10>

『少年世界』 第2巻第8号 明29.4 博文館

※話の筋が変えられている。白雪姫、小人が和服を着ている。

#### 7. 「雪姫」

『世界お伽噺第9篇』 寺谷大波(友吉)編 東京 明41.12 博文館 <YDM103070>

※「七人のこびと」が「七人の武士」となっている。

#### <ブレーメンの音楽隊>

年老いたろばが犬、猫、鶏とともに音楽家になろうとブレーメンを目指すお話。ろばが窓に足をかけ、その上に犬がのり、そのまた上に猫が乗り、一番上に鶏が乗りました。そして一斉に鳴き声をあげました。家の中にいた盗賊達は魔物だと思い逃げてしまったので、4匹はその家で平和に暮らししました。

8. 「ブレメンの音楽師」

十時巴

<雑52-10>

『少年世界』 第8巻第1号 明35.1 博文館

9. 「<sup>まちおんがく</sup>街道音楽」

『少国民』 第5年第2号 明26.1 鳴臯書院〔編〕 鳴臯書院

<雑52-1>

10. 「<sup>たびがくし</sup>旅楽師」

『グリムお伽噺 新訳解説』 近藤敏三郎 精華堂 明43.9

<YDM102987>

※1話ごとに教訓がついている。「天は自ら助くる者を助く」

<蛙の王様>

姫は蛙と友達になる約束をして落とした鞆を取ってきてもらいます。姫は王様に言われて嫌々約束を守っていましたが、カッとして蛙を壁に投げつけたとたん魔法が解け、蛙は王子の姿に戻りました。

11. 「<sup>ひきがえる</sup>蝦蟇の王の話」

『少国民』 第8年第4号 明29.2 東京北隆館出版部

<雑52-1>

※和服を着ている。

12. 「<sup>ひき</sup>小娘と蝦蟇」

『女学雑誌』 105号 明21.4 女学雑誌社

<雑51-4>

※話の結末が大幅に改変されている。蛙の正体は実は子どもの神様で、さらには母親ではないかということになっている。

13. 「<sup>おうじ</sup>蛙の皇子」

『お伽世界 学校家庭』 小林鶯里著 272p(以下欠) 15cm

<YDM102890>

※姫の名前が「菊姫」となっている。障子を開けて座敷に蛙が入ってくる。

<運のいいハンス>

ハンスはお給金をもらって故郷に帰る途中、金を馬に変え、馬を牛に、牛を豚に、豚を鷺鳥に、鷺鳥を砥石に、砥石を川に落とし何もかもなくしてしまいましたが、重荷がなくなって自分は果報もんだと思っているというお話。

14. 「正直正兵衛」

『日本お伽噺』 森田吐川著 大阪 成象堂 明44.12 (今昔叢書) <YDM103111>

<シンデレラ>

継母と二人の姉にいじめられ、シンデレラ(灰かぶり)と呼ばれていた娘が最後に王子さまと結婚するお話。

実の母の墓のそばの木から金の靴とドレスを出してもらったシンデレラは舞踏会に出かけます。最後の晩シンデレラが落としていった片方の靴によって、王子はシンデレラを見つけ、結婚します。

15. 「シンデレラの奇縁」

『西洋古事神仙叢話』 菅了法訳

東京 集成社 明20.4 145p 19cm

<YDM205206>

※グリムの初訳。英訳本と思われる。

16. 「シンドレラ嬢奇談すなわちたいせいはいいきだん(即泰西皿々奇談)」

『西洋妖怪奇談 小学講話材料』 渋江保(幸福散史)訳

<YDM103068>

東京 博文館 明24.8 265p 20cm

<金の毛が三本ある鬼>

幸運により王女と結婚した男の子が王の出した難題を解決し幸せになるお話。王が出した難題とは、鬼の金の毛を三本取ってくるというものでした。鬼の母親の手助けで、三本の毛と旅の途中に受けた三つの質問の答えを手に入れた男の子は、金貨もたくさん手に入れて城へ戻ります。王は、自分も金貨を得ようと出かけ、渡し守にされてしまう。

17. 「うきぎまる浮木丸」

『浮木丸』 尾崎紅葉 東京 春陽堂 明29.9 245p 24cm

<YDM92927>

※読売新聞「三筋の髪」明治26年1月1日～1月31日の改題。

絵は、浮木丸(主人公)が寝ている間に、大盗人が「浮木丸を殺してしまえ」という左衛門尉(グリムでは王様)から奥方に宛てた手紙を読んでいるところ。大盗人が手紙を書き換えることで浮木丸の命は助かる。

<赤ずきん>

・・・「おばあさんのお口はどうしてそんなに大きいの?」「それはお前を食べるためだよ。」

赤ずきんが、病気のおばあさんを訪ねていく途中道草し、おばあさんも赤ずきんも食べられてし

まいります、通りかかった獵師に助けられるお話。おおかみはお腹に石を詰められ死んでしまいます。

18. 「赤帽さん」

『家庭お伽噺』 和田垣謙三、星野久成訳 <YDM102956>

東京 小川尚栄堂 明42.3 332p 19cm

※教訓「素性の知れないものにウツカリ気を許してはいけません。」

19. 「山のお使い」

『童話新集 第5編 山羊のお母さん』 初島順三郎著 <505-8>

東京 中村書店 大正10 140p 19cm

※赤ずきんが町子さんという名前になっている。

<六羽の白鳥>

妹姫は様々な苦難に遭いながらも、白鳥の姿にされた6人の王子の魔法を解くため6年間一言も口を利かず6枚の襦袢をあみ続けます。そして無実の罪で処刑される寸前、襦袢はできあがり、王子達はもとの姿に...

20. 「七羽鳥」

蓮山人 <雑52-48>

『幼年雑誌』 第1巻第17-22号 明24.9-11 東京博文館

※日本風に翻案。

アンデルセン

<裸の王様>

きれいな着物が好きな王様が二人の詐欺師にだまされ、ありもしない衣装を身にまட்டுパレードを行う話。子どもの「王様は何も着ていない。」という言葉で、王様も騙されていたことに気づきました。

21. 『王様の<sup>しんいしょう</sup>新衣裳 諷世奇談』

河野政喜(在一居士)訳 東京 祥雲堂 明21.12 28p 19cm <YDM102875>

※単行本としては最も古いと言われている。ゾルデの仏訳からの重訳。

風刺を鋭く受け取っている。完訳に近い。

22. 「不思議の<sup>あたらしきいしょう</sup>新衣裳」

『女学雑誌』 100・101号 明21.3 女学雑誌社 <雑51-4>

※「天皇」という言葉をつかっている。

101号では、子供が天皇は下着姿だというが、見物人は「こは尚ほ新衣裳の立派なることをほめたるにて候ひしとなり。」とし、正直がよいという教訓で結んでいる。

23. 「<sup>ころもだいみょう</sup>狂言衣大名」

杉谷代水

<雑8-40>

『早稲田文学』 〔第2期〕 明39.3 早稲田文学社

24. 「<sup>はだか</sup>裸体の王様(教訓小説)」

ソルデ著 萬代花舟訳

<雑52-1>

『少国民』 第12年25号 明33.11

※フランス語訳からの重訳。

<マッチ売りの少女>

クリスマス・イブの夜、貧しいマッチ売りの少女が暖まろうとマッチをすりました。すると暖かい部屋やご馳走やクリスマスツリーが現れました。最後におばあさんが出てきたので、少女は一緒に天へ連れて行って下さいと頼み、一緒に空へ上って行くというお話。

25. 「燐寸売の小娘」

『アンダアゼンお伽噺 新訳解説』 近藤敏三郎訳

<YDM102856>

東京 精華堂 明44.4 264p 図版 20cm

※1話毎に解説(教訓)が付いている。

26. 「マッチ売」

『フブン館世界お伽噺 第3編』 大波、柴山著 お伽倶楽部編

<特104-834>

東京 博文館 大正3 9冊(各48p) 22cm

※マッチをするのではなく、「心の燈火」でおばあさんが出てくる。

27. 「マッチ売娘」

『赤靴物語』 百島操訳編

<YDM102854>

東京 内外出版協会 明41.2 100p 19cm

(通俗文庫 第4編)

<おやゆび姫>

花から生まれた親指姫が、旅の末、花の妖精の王子のお后になる話。

28. 「新竹取物語」

みやつこまろ

<雑52-10>

『少年世界』 第1巻第19、21、22号 明28.10—11 博文館

※日本風に翻案されている。

<雪の女王>

仲良しのカイとゲルダ。ある日、美しいものがゆがんで見える鏡のかけらがカイの目に入り、そしてカイは雪の女王に連れ去られてしまいます。苦難の末、雪の女王の城へたどり着いたゲルダの熱い涙によって「永遠」という文字を並べることが出来たカイは、自由の身となり、二人は町へ帰ります。

29. 「雪の女王」

『教育お伽噺』 和田垣謙三、星野久成訳

<YDM102971>

東京 小川尚栄堂 明43.10 335p 19cm

※主人公の名前が太郎と美いちゃんとなっている。

<小クラウド大クラウド>

クラウドという二人の男がいました。貧しい方が小クラウド、お金持ちの方が大クラウドと呼ばれていました。小クラウドは、知恵でお金持ちになり、それをみた大クラウドが小クラウドの口車に載せられて、さんざんな目にあつた挙げ句、川に投げ入れられて死んでしまうお話。

30. 「お伽劇<sup>ににくろすけ</sup>二人黒助」

佐藤紅緑

<雑52-42>

『少年界』 第9巻6号 明43.6

※和風の絵。

参考文献

- 石川春江(1980) : 『国立国会図書館の児童書』 創林社 <UP49-17>  
石川春江(1986) : 「妖精がはじめて日本に来たころ—明治期のグリム童話の翻訳」  
『グリム童話のふるさと』 新潮社 <KS357-63>

◎請求記号が YDM ではじまる資料は、マイクロ資料でのご利用になりますので、展示期間中でもご利用になれます。

国立国会図書館 03-3581-2331(代)  
ホームページアドレス <http://www.ndl.go.jp>

■国立国会図書館■□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□■03(3581)2331■